

「積極的なコミュニケーション能力」の育成に向けた 生徒の主体的・対話的で深い学びの充実

指導主事 築 義彦 研究協力員 熊本県立南関高等学校 教諭 川崎 裕子

1 研究主題について

熊本県立南関高等学校の学校教育目標には、「地域を思い、地域を積極的に支えていくたくましい人間力の育成」とある。また、前年度末に実施した、検証授業実施学年の生徒を対象としたアンケート調査からは、「自分の考えや意見を発表し、文章にまとめること」を苦手とする生徒が多いことが明らかとなった。これらを踏まえて、本研究では授業を通して育てたい生徒の姿を「積極的にコミュニケーションを取り、行動する姿」とし、その姿を実現するために育てたい資質・能力を「積極的なコミュニケーション能力」とした（図1）。ここで言う「積極的な」とは、学校教育目標に鑑み「主体的に課題に取り組む、社会に関わろうとする」という意味である。

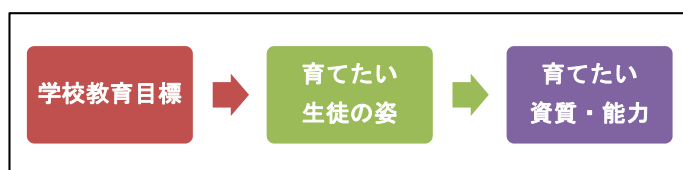


図1 育成する資質・能力の設定

2 研究の視点

(1) 視点1について

平成28年8月に示された中央教育審議会教育課程部会社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける「審議の取りまとめ」によれば、次期学習指導要領改訂で公民科において育成を目指す資質・能力として1)「よりよい社会の実現のために現実社会の諸課題を見出し、その解決に向けて他者と協働して意欲的に考察・構想し、論拠を基に説明・議論することを通して、社会に参画しようとする態度（下線部執筆）」があげられている。このことを踏まえて、本研究では生徒たちの「積極的なコミュニケーション能力」を育成するための学習活動として、「多様な価値観をもつ他者との対話」を主軸に据えることにした。また、学習活動を生む「問い」の工夫として、小单元ごとに「当事者意識を生む問い」を設定した（図2）。

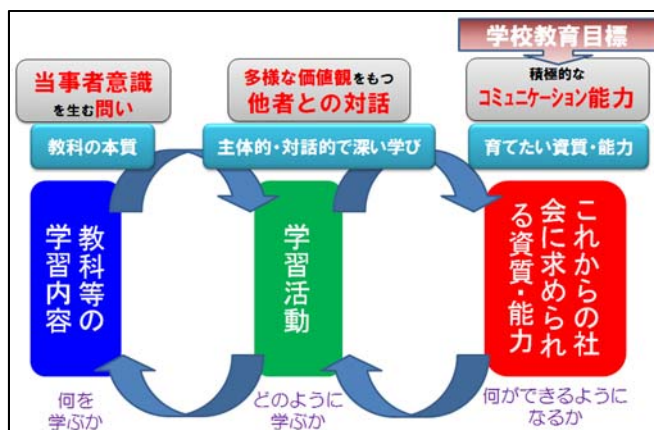


図2 公民科におけるこれからの社会に求められる資質・能力へのアプローチ

(2) 視点2について

本研究では、視点1でも述べたように「当事者意識を生む問い」について「多様な価値観を持つ他者との対話」を通して考える課題解決的な学習を設定した。そこで、授業における課題解決へのプロセスを振り返り、「課題についての知識を得る前と後では、自分の考えがどのように変容したのか」、さらに「グループでの対話によって、自分の考えがどのように深められたのか」を生徒自身が見とれるように、ワークシートを工夫した。また小单元ごとに生徒に学びについての「自己評価」を行わせ、それに対して教師がコメントを返す取組によって、生徒が主体的に学習に取り組む姿勢を支援した（図3）。

人の意見を聞き、善点を指摘し					
人に質問されたら、自分の考					
を、実際の社					
30	自分に自信をもって。今のなら大丈夫！ 自分の考え発表してやるよ！！				

図3 生徒の自己評価と教師のコメント

(3) 視点3について

本研究では、各小単元において自分の考えを伝え合う活動を設定し、すべての生徒が授業に「参加」し、習得した知識・技能を「活用」するようにした。

また、個人で課題に向き合う際や、グループで考えを伝え合う際に、考えるための材料を見極めて提供することで、より深い思考が促されるようにした。

さらに、教師が資料を提示して説明する際や、生徒の学習活動の時間管理にICTを活用し、生徒一人一人の学習内容の理解や、授業に対する見通しを支援するようにした。

2 研究の実際

検 証 高等学校 第3学年「現代社会」
単元名 「豊かな社会の実現を目指して」

(1) 本単元の授業設計

① 単元の指導計画

5ヶ月後に卒業を控え、生徒は進路先の決定にむけて日々努力をしている。このような生徒たちに、社会へ巣立ち、生き抜いていくための実践的な力を育まなければならない。しかし、多くの生徒が現代社会に山積する諸課題を、自分のこととして捉えきれずにいる。そこで、単元の基軸となる学習課題を「だれもが安心して生活することができる社会を実現させよう」とし、小単元ごとに「当事者意識を生む問い」を設定することで、課題意識をもって授業に臨めるように単元の指導計画を作成した。

表1 単元の指導計画（8時間扱い）

次	時	学習活動	評価規準
1	1	①公害の歴史を知る。 ②政府や企業の環境保全に対する取組を知る。	知識・理解① 単元テストで7割以上正解している。
	2	①循環型社会を目指して、自分にできることを考える。	関心・意欲・態度① 自分の考えを、ワークシートに記入している。
2	1	①契約に関する基本的な考え方を理解する。 ②消費者としての権利や責任について考察する。 ③消費者を取り巻く諸問題にどのように対応すべきかを考える。	知識・理解② 単元テストで7割以上正解している。 関心・意欲・態度② 消費者問題を自分事とし、他者と積極的に意見交換している。

3	1	①市場経済における労働者の役割について確認する。 ②労働基本権、労働基準法について理解する。	知識・理解③ 単元テストで7割以上正解している。
	2	①失業率の問題や非正規雇用の問題などについて考える。	資料活用の技能① ワークシートに、資料から読み取った内容を記入している。 思考・判断・表現① 資料を活用し、考えをまとめている。考えが伝わるように工夫して発表している。
	3	①外国人労働者の受け入れを拡大していくための方策について考える。	思考・判断・表現② 根拠を示しながら、グループで合意点を見出そうとしている。
4	1	①社会保障の意義を理解する。 ②日本の社会保障制度を理解する。 ③日本の年金制度を理解する。 ④日本の年金の財源の調達方法を理解する。	知識・理解④ 単元テストで7割以上正解している。 思考・判断・表現③ 資料を活用し、考えをまとめている。考えが伝わるように工夫して発表している。
	2	①日本の年金制度の課題を理解する。 ②持続可能な年金制度のあり方を考える。	資料活用の技能② 資料を活用して、ワークシートに、自分の考えを記入している。 思考・判断・表現④ 根拠を示しながら、グループで合意点を見出そうとしている。

② 学習課題の設定

本研究では、生徒の「積極的なコミュニケーション能力」を育成するため、「当事者意識を生む問い」について「対話」を通して課題解決を図る活動を中心的な活動に位置付けた。そして、各小単元の学習課題を次のように設定した。第1次の学習課題は「地球規模の環境問題を把握し、私たちにできることを考えよう」、第2次は「自立した消費者になるために必要な知識を身に付け、消費者としてあるべき姿を考えよう」、第3次は「自分が社会の中心となって働いているときに、どのような労働環境になっているとよいか考えよう」、第4次は「資料や友人の意見を踏まえて、持続可能な年金制度のあり方を考えよう」

である。第1次では、地球規模の環境問題に対する取組について、先進国と発展途上国のそれぞれの立場から考え、経済発展と環境保全を両立するために、自分にできることは何かを考えさせた。また、第2次では実際に起こりうる消費者問題について、具体的な事例をもとに考えることで、生徒が当事者意識をもって課題に取り組めるようにした。第3次では、労働基準法の学習をもとに、アルバイトの場面におけるロールプレイを行ったり、少子高齢化を背景として喫緊の課題とされる労働力不足の問題について対話を通して考えたりする学習を通して、生徒が労働問題を身近に感じられるようにした。第4次では、持続可能な年金制度について、資料を活用し、対話を通して考えることで、「だれもが安心して生活することができる社会を実現させよう」という単元の基軸となる学習課題に、生徒が向き合うようにした。

(2) 指導の実際

ここでは第8時(第4次第2時)について述べる。

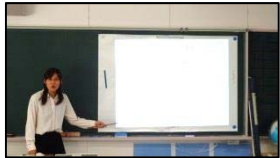
第8時 資料を活用し、対話を通して主体的に課題解決を図る

① 目標

既習の知識や資料をもとに、持続可能な年金制度について考え、自分の意見を表明する。また、多様な価値観をもつ他者との対話を通して、主体的・対話的に課題を解決しようとする言語活動によって、積極的なコミュニケーション能力や、社会に参画する力を身に付けることを目標とした。

② 展開

過程	学習活動	指導上の留意点
導入 15分	1 本時の目標を確認する。	【視点3】 学習目標と本時の流れを説明し、生徒が見通しをもって授業に参加できるようにする。
	学習目標 資料や友人の意見をふまえて、持続可能な年金制度の在り方を考える。	
	(1)本時の問いについて、既習の知識をもとに考える。	【視点2】 本時の学習前の、自分の考えを整理する。
	本時の問い 100年安心して続く年金制度を考えよう。	
	(2)少子高齢化により、若者の負担が増えていくことに気づく。	【視点1】 少子高齢化に伴い、年金制度を支える若者の負

	(3)世代ごとに保険料の負担額と年金給付額の差が大きいことに気づく。 (4)国民年金の未納率が上昇していることに気づき、年金制度のあり方に対する問題意識を高める。	担が増大することに気づかせ、本時の問いに当事者意識をもたせる。 【視点3】 ICTを活用して資料を提示する。 
展開 25分	2 本時の問いについて話し合う。 (1)本時の問いについて、本時の学びと資料をもとに考え、自分の意見をワークシートに記入する。 (2)班員の意見を聞く。 (3)班の意見を一つにまとめる。 (4)班の意見を発表し合う。 言語活動(設定の意図) 年金制度については、保険料を納める側と受け取る側の両方の立場から考えていかなければならない。他者との対話の中で自分では気づくことができない視点に気づくことを通して、社会に参画する力、広い視野でものごとを考える力を育む。 	【視点1】 個人で課題に向き合い、考える時間をとった後に、意見を出し合い、比較・検討して意見を一つにまとめる言語活動を通して、積極的なコミュニケーション力を育む。 【視点2】 思考ツールを用いて各自の解決策を分析させ、思考を深めさせる。 【B規準】 班の中で、根拠をもって自分の考えを表現することができる。 
まとめ 10分	3 学習を振り返る (1)社会保障についての学習を通して分かったことや、知りたいと思ったことをワークシートに記入する。 (2)自己評価をする。	【視点2】 学習を通して、自分の考えがどのように変わったかを振り返る。 【視点3】 生徒の自己評価に対して、教師がコメントを返すことで、指導と評価の一体化を図る。

以下は「100年安心して続く年金制度」にするための方策として、生徒から出された意見の一部である。

【財源確保の方法について】

○税方式寄りの賦課方式にする。

(理由) 賦課方式にすると世代間の格差が出て、積立方式ではインフレなどの問題に対応できないので、税方式寄りの賦課方式にすると短所が軽減される。

(理由) 賦課方式の短所である少子高齢化に影響されることと、未納・未払いが発生せず世代間の格差が是正されるから。

○賦課方式と積立方式を併用する。

(理由) 賦課方式と積立方式を半々にすると、年金制度に対する意識も高まり助け合いもできる。

(理由) 賦課方式と積立方式を半分ずつにすれば、物価もともに保険料をある程度上げられるし、ある程度意識も高まる。

○積立方式寄りの賦課方式にする。

(理由) 少子高齢化が進んでも対応しやすい。

【月の保険料について】

○増額する。

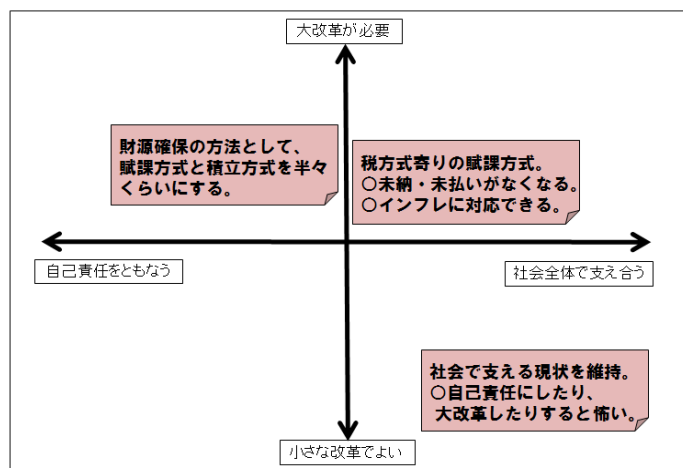
(理由) 今よりもう少し保険料を増やした方が、高齢者がよい生活を送れるのではないかな。

(理由) 新しい病気が増え、病気になる人も昔より増えているので、医療費がかかりやすい。保障を手厚くするためには保険料を上げるしかない。

○現状維持がよい。

(理由) 私たちが働き出してからもらう給料では、保険料を増やすと生活するのがきつい。

これらの意見を班で比較・検討し、最も重要と思われる制度改革の案を1つに決め、班ごとに発表した。以下は、各班から出された案を授業で使用了思考ツールを模して示したものである。



(3) 検証結果と考察

この研究では、公民科学習に関する意識として4段階の尺度で質問を16項目行い、単元の学習前後における回答を分析し検証を行った。以下は、特に高まりがみられた項目について示したものである。

質問2 現代社会の授業の中で、これまでの学習や経験を活かして自分の考えを持つことができています。

質問3 現代社会の授業で課題を解決するときに、一つのやり方だけでなく、別のやり方がないか考えるようにしている。

質問5 現代社会の授業で学んだことは、将来、社会に出たときに役立つと思うことがある。

質問8 グラフや表などの資料や文章などを、自分の考えを持つために役立てている。

質問9 現代社会の授業の中で、先生や他の人に質問されたりアドバイスされたりすることによって、自分の考えが広がったり深まったりしている。

質問14 自分は、現代社会の授業を通して、「積極的なコミュニケーション能力」が高まっていると思う。

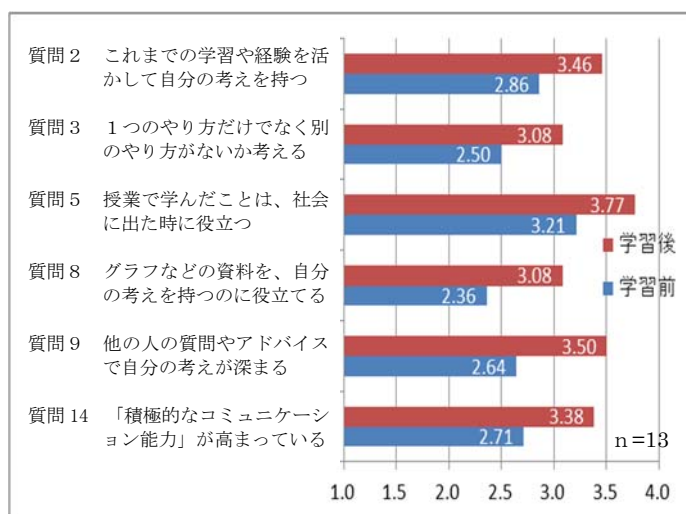


図4 単元学習前後の意識調査（一部抜粋）

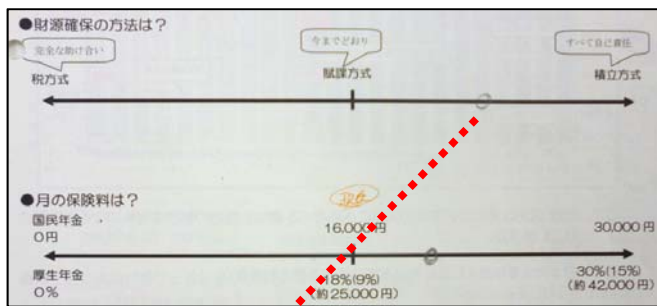
視点1について

質問5の項目に高まりがみられたことから、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って課題に取り組む主体的な学びが、質問9、14の2項目に高まりがみられたことから、生徒同士の協働、教員との対話を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める対話的な学びが実現されたと考えられる(図4)。また質問2、3、8の3項目に高まりがみられたことから、習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせながら、課題を解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」が実現されたと考えられる。

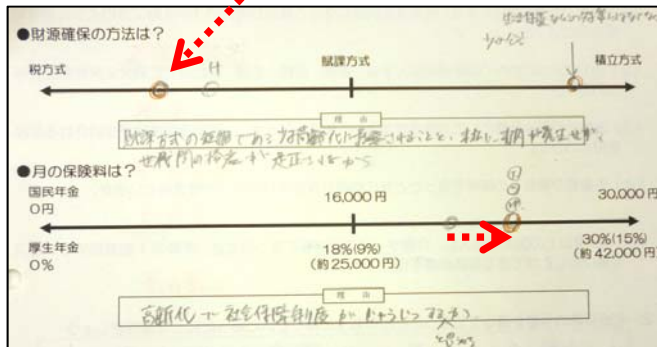
視点2について

以下は、第8時の当事者意識を生む問い「100年安心して続く年金制度を考えよう」に対する、生徒の考えの変容を示すワークシートの記述例である。

生徒A（授業導入時）

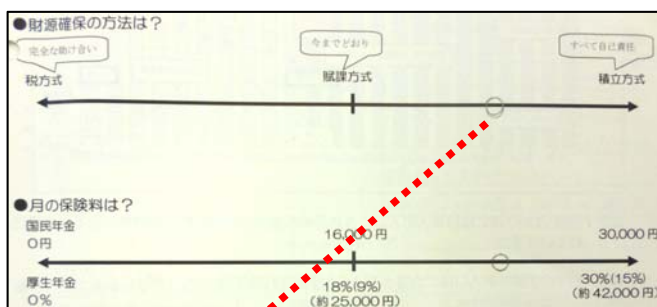


（まとめ時）

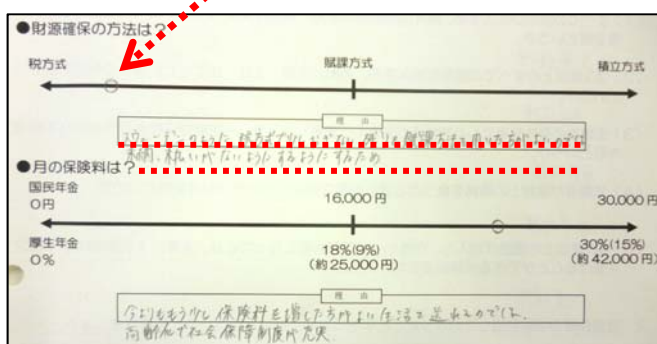


生徒Aの記述例からは、授業を通じて現在の年金制度の問題点に気づき（社会保険料の未納率の上昇や給付水準の低さなど）、年金の「財源確保の方法」について、授業の終末では自分の考えが大きく変わったことが分かる。また、課題解決へ向けた話し合いの中で、他の生徒の考えを聞き、対話を重ねた結果、「月の保険料」については、「増額すべき」との判断が働いていることが分かる。

生徒B（授業導入時）



（まとめ時）



生徒Bの記述例からも、年金の「財源確保の方法」について、授業の導入時には「積立方式」を取り入れるべきと考えていたものが、まとめ時には「税方式」に重点を置くべきであると考えが変わったことがわかる。さらに、その「理由」についての記述（「スウェーデンのように税方式で少し補い、残りの部分で賦課方式を用いた方がよいのでは。未納・未払いがないようにするため」）からは、授業で得た知識や話し合いで出された意見だけでなく、提供された「世界各国の社会保障制度」などの資料も活用して、自分の考えを深めていったことがうかがえる。

また、この時間の終末には、小単元の振り返りとして「社会保障の学習を通して分かったことや、もっと知りたいと思ったこと」について、自由に記述させた。以下は生徒の記述から抜粋したものである。

生徒C 今から社会で働いていく立場なのに、ほとんどのことを初めて知ったので、知らないことがあるのは恥ずかしいと思った。これから働く私たちにもいろいろな問題が関わってくるので、この範囲はきちんと勉強しておきたいと思った。今までのように他人事にするのではなく、自分たちの問題としてきちんと向き合っていきたい。

生徒D 社会保障の中の保険の名前は、どれも聞いたことのあるものばかりでした。しかし、きちんとした意味を知っているものは少なく、今回きちんとした意味を知れてよかったです。また、年金財源についての学習で、日本に本当にあっている方は、賦課方式なのか、積立方式なのか、しっかりと明確な意見を導き出し、よりよい日本の流れが創っていけるように、その点をもっと深く調べ、たくさんの人の意見を聞き、考えを深めたいと思いました。

※下線部は執筆者による。

いずれの記述からも、社会保障制度の課題について「当事者意識」をもって考えようとする意識の高まりがうかがえる。

視点3 学びのUD化と効果的なICTの活用

本検証では、生徒のより深い思考を促すため、各種統計をはじめとする資料を見極めて提供した。読み取りが難しい資料については、ICTを活用して全体に提示しながら教師が解説をすることで、生徒の理解が促されていた。

また、資料を活用しながら個人で思考する時間とった後に、グループで対話する時間を設定したことで、すべての生徒が自分の考えをもって協議に参加する様子が見られた。

3 研究のまとめ

今回の公民科の研究では、「地域を想い積極的に社会を支えていくたくましい人間力の育成」という学校教育目標と生徒の実態を踏まえ、育てたい生徒の姿を「積極的にコミュニケーションを取り、行動する姿」とした。さらに、その姿を実現するために育てたい資質・能力を「積極的なコミュニケーション能力」とし、それを育むための学習活動として「多様な価値観をもつ他者との対話」を柱に据えた。また、学びを引出す問いの工夫として、小单元ごとに「当事者意識を生む問い」を設定した。意識調査や、自由記述等の分析からは、生徒が当事者意識を持って主体的・対話的に学び、積極的にコミュニケーションを取ろうとする意識の向上が見てとれた。

また、以下は、小单元の終末ごとに、4段階の尺度で質問を5項目行い、各小单元の学びと公民科学習に関する意識の相関関係について調査した結果を示したものである。質問1，5からは「主体的に課題に取り組み、社会に関わろうとする意識」を、質問2，3，4からはおもに「コミュニケーションについての自己効力感」を見とろうとした。

質問1	自分は、現代社会の授業で新しい問題や課題に出会ったときに、それを解いたり、解決したりしてみたいと思う。
質問2	現代社会の授業の中で、自分の考えや意見を発表している。
質問3	自分は、現代社会の授業の中で、他の人の意見を聞いて、よいところを取り入れたり、改善点を指摘したりしている。
質問4	現代社会の授業の中で、先生や他の人に質問されたりアドバイスされたりすることによって、自分の考えが広がったり深まったりしている。
質問5	自分は、現代社会の授業で学んだことを、実際の社会に役立てていきたいと思う。

表2 小单元ごとの意識調査 ※3.25以上に網掛け(n=13)

	環境 問題	消費者 問題	労働 問題	社会 保障	平均
質問1	3.00	3.00	3.27	3.17	3.11
質問2	3.00	2.83	2.82	3.25	2.98
質問3	3.00	3.00	3.36	3.42	3.20
質問4	3.18	3.25	3.27	3.33	3.26
質問5	3.36	3.42	3.36	3.67	3.45

質問5の項目について単元を通じて数値が高いくことから、本単元の学習を通して社会に関わろうとす

る意識が高まったと考えられる。また、質問1の項目について、小单元「労働問題」で特に数値が高いのは、卒業を間近に控え、就職して働くことを意識する機会が増えている生徒たちにとって、学習課題が切実に「自分ごと」になったことが理由ではないかと考えられる。さらに、質問3，4については、単元の学習が進んでいくにつれて、数値が高まる傾向が読み取れる。これは、単元を通して意図的・計画的に言語活動を設定したことと、後半に行くほど生徒が自分の考えをまとめるための根拠となる資料を数多く提供したことが、生徒どうしの話し合いに広がりや深まりを生み出した結果であると考ええる。

2(1)でも触れた次期学習指導要領改訂へ向けた「社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」では、新科目「公共」において2)「重視する思考力等と授業イメージ」が示されている。その中で、具体的な「問い」の例として「持続可能な社会を実現するために、私たちは何をすべきだろうか」という「当事者意識を生む問い」があげられている。また、授業展開の例として「異なる文化や習慣、価値観を持った人々が協働して、社会に参画していこうとする態度を養う」とある。このような授業のイメージは、まさに今回私たちが提案する授業のあり方と方向性を一にするものであり、したがって、本研究で実践した授業は新科目「公共」の先行事例としても提案できると考えている。「積極的なコミュニケーション能力」という資質・能力の育成へ向けて、「当事者意識」を生む問いを軸に、多様な価値観を持つ他者との対話を促す。公民科学習における、このような授業実践の小さな積み重ねは、「主権者教育」そのものでもあり、その結果として、教育基本法第2条に示される3)「主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う」ことにもつながるものと考ええる。

一方で、本研究には課題もある。実践事例や検証データの蓄積が不十分であることや、学習内容の質と量をいかにして担保していくかということ。さらに、育まれた資質・能力を実際に社会の中で役立てる場面をいかにして設定するのかなどがあげられる。これらの課題に対して、今後とも研究を継続することはもちろん、研究を「社会とつながり」を重視した取組にも発展させたいと考えている。

最後に、第8時の授業の後に、抽出した生徒に行ったインタビューで得られたコメントを一部抜粋して以下に示す。

聴き手：川崎先生の授業は、少し難しい課題であっても、みんなで一緒に考えていこうという授業が多いと思います。今日のような、自分の将来に関わるようなことを、みんなで考える授業をどう思いますか？

生徒E：みんなそれぞれ、違った意見をもっていて、ああそういう場合もあるんだとか、新しい発見ができるのでとても面白いと思います。

生徒F：（このような授業は）とても、私はいいと思います。みんなで話し合っているんな人の意見を聞くこともできるし、また定期考査などでも、とても復習にもつながって、頭に残りやすく、とてもいいと思います。

生徒G：私もこの活動はすごくいいと思います。前までは、社会とか政治とか全然本当に分からなかったのですが、こういう活動をして、みんなの全然違う意見とかを聞いて、考えを深めることになって、社会のニュースとかを見ていると、「あっ面白いな。」とか、分かりやすくなりました。

聴き手：今日のような授業で学んだことを、将来どんなふうに活かしていきたいですか。

生徒E：自分が就職して話し合いの場とかでも、今日みたいに良いところと悪いところで意見を出して、正解はないですけど、結果的に一番良いのに近いのはどこだろうとかとか、そういうのをいろんな人と考えて、もっと社会をよくしていきたいと思います。

生徒G：私も大学とかで、いろいろと企画をするときなどに、みんなで話し合う機会が絶対にあると思うので、その時にどうみんなの意見をまとめて、いかに「長所」と「短所」を見極めるかというのは考え方として、大切だと思うので（生かしていきたいです）。

聴き手：こういう授業で、コミュニケーションの力はついていると思いますか。

生徒全員：ついていると思います。

聴き手：なぜ、そう思いますか。

生徒E：自分は最初コミュニケーション能力が高くて、こういった話し合いとか、自分の意見を出すことは苦手だったけど、みんなと話したりすることで、授業のこともわかってくるし、自分の意見を言って、また新しい発見とかが生まれて、とても面白いなと自分の中で思って、「もっと言っていこう。」とか「もっと意見を出した方がいいな。」とか思うようになって、コミュニケーション能力が高くなったと思います。

生徒G：私もみんなとコミュニケーションを取るのはすごく苦手だと思うんですけど、その中でもなかなか話したことのない人と、意見を交わし合うという経験をして、自分の意見に自信をもてたりとか、自分のあやふやだった考えがまとまるというのがよいと思ったし、そのおかげでコミュニケーションがとりやすくなったと思います。

※下線部は執筆者による。

これらのコメントからも、授業を通して「積極的なコミュニケーション能力」など、生徒たちの「これからの社会に求められる資質・能力」が向上していることがうかがえる。また、生徒たちが、自分自身の変容（成長）について、実感をともなって認知していることが分かる。このことは、生徒たちの自己肯定感（自己効力感）の向上にも良い影響をもたらすと考えられる。

〈引用・参考文献〉

- 1) 中央教育審議会教育課程部会(2016)『社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』資料3
- 2) 中央教育審議会教育課程部会(2016)『社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』資料25
- 3) 『教育基本法』第一章第二条三(2006)
 - ・中央教育審議会教育課程部会(2016)『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』